

『九十九句』を語る会

芭蕉会議 二〇一九年七月十三日(土)二時半

於：台東区生涯学習センター

パネリスト 荻原貴美

春やむかしこの駅を終着とせし

キーワード… 終着、行きかふ

鑑賞…不思議な作品である。終に着いたはずの駅は終着駅ではないのだ。この作品はむかし駅に降り立ったところを単に懐かしんでいるのではない。何かこれから始まろうとする、動き出そうとすることがこの句から伝わってくるのだ。末尾の「せし」で終わることによって余韻が生まれ連続性を期待させる。

終着としたこの駅というのはどこだろうか。故郷の駅だろうか。今暮らしている近くの駅だろうか？しかしこの句の焦点は別のところにあるのではないかと思われる。

芭蕉が『おくのほそ道』冒頭に書いている「月日は百代の過客にして行きかふ年も又旅人也」の「行きかふ」は会っては別れる人生の旅のことである。終着と思ったところから又、次の人生の旅が始まる。

下萌えは静か枯草にぎやか

キーワード… 対比、見えないものへのまなざし

鑑賞…春が近づいてくる大地の命のにぎやかさ。草のあたりの匂いまで伝わってきそうである。又、対比の妙が素晴らしい。動と静・・にぎやかー静か
情熱と枯淡・・下萌えー枯草

海紅先生の小さきものへの愛、見えないものへのまなざし、負とみえるものへの優しい目、これから伸びてゆくものへの愛が感じられる。

春雷に明るくなりしベンチかな

キーワード… ベンチ、希望

鑑賞…轟く音に反して希望が湧いてくるような場面を想像させる作品である。ベンチには誰かが座っていた。その人は希望をなくして暗い気分だったかもしれない。しかしその人の人生は思っているよりずっと良いものに向かっているのだ。孤独は誰にでもつきものだけれど。雷の閃光は象徴的にベンチのすがたを強烈な光で浮かび上がらせる。明るさも孤独も一斉に照らし出す。

句碑守るといふ言の葉のあたたかき

キーワード…言の葉、人の心の純粋な優しさ

鑑賞…蕉門の丈草が、義仲寺で芭蕉没後三年、喪に服し墓守をし、純粋に芭蕉を敬愛していた俳諧師であったことを思い起こさせる。人間の誠の心を大切にしたいという作者の思いが重なって読み取れる。言の葉という古今集を思わせる雅な言葉が句碑を守るといふ地道な行いに当てられているのが尚の事やさしく思われる。下句の「あたたかき」が全体を大きく包みこんで読む者も純粋な気持ちにさせてくれる。

若竹や驚きやすき鹿の耳

キーワード…

鑑賞…おそらくこの鹿は、若竹の様にまだ若い。

鹿は臆病な性格ゆえ少しの物音にも敏感だと言う。若い鹿ならなおさらである。

柔らかな若竹のイメージをそのまま敏感な鹿の耳に取り合わせて、生命の新鮮な瞬間を捉え、光る大きな目の鹿の様子まで見えるようである。

生きものの動きを見逃さず詠み取って心地の良い緊張感がある。

書くことに倦むとき汗の子を膝に

キーワード… 汗の子、

鑑賞…子への愛情が素直に伝わる。夏場の子供の体は汗ばみ熱い。そして良いにおいを放つ。生命のにおいである。ほやほやのこれから伸びてゆく芽の様に柔らかい。

身体は不思議な重さだ。走らせていた筆が鈍る時、膝に乗せる子の命は、心に休息を与えてくれる。倦むと言う負の要素のある言葉は、疲れた、やめたい等の心持ちを連想させるが、敢えて伸び盛りの柔らかな命と取り合わせることで子供への愛情が率直に感じられる。

空にゐる人呼ぶ手指盆踊り

キーワード… 手指、鎮魂

鑑賞…盆踊りのあの手指は浮かれている動きではなかったのだ。残された者より一足早く彼の岸に逝った人へ呼びかける手指の合図だったのだ。もう一度本当に会いたい。けれども決して会うことはない。死によって分かれた人を思う時、誰にも代わることでできない喪失感に果てしのない寂しさだ。手指による天への挨拶は残された人の自らへの鎮魂でもあるのだ。

乾坤の吐息の如き霧に住む

キーワード…霧、

鑑賞…自然を人に擬して「吐息の如き」霧としている。吐息は人間の方がしているのかも知れない。乾坤の谷間でひとは時に迷い、先が見えない。この句を、授業の中で海紅先生に教えていただいたとき、乾坤という大きなイメージと吐息という人間の体温を感じる取り合わせの巧みに驚かされた。

素十の句に『かたまりて通る霧あり霧の中』『空』ふらんす堂)がある。心のあり方は同じところにあると思われるが、作者のこの句には、素十の句にはない大きさと宇宙的なふくらみがあるように思われる。

羽子板の大きなひとみ初明かり

キーワード…ひとみ、未来

鑑賞… 娘にプレゼントした羽子板には、黒く大きな瞳の少女が描かれる。その大きな瞳は娘のものでもある。元旦の曙のように晴れやかだ。娘へのいとしさと子供のくれる未来への明るい希望が伸びやかに伝わってくる。

美しき足をたたみて虫凍つる

キーワード…

鑑賞… ヒヤリとした感覚があるのに不思議と暗いイメージがしないのである。死んで凍てついてしまった虫の美しい足は折りたたまれて。「美しい」と形容された足に注がれる目は、死んでしまった生き物の切なさも伝える。真っすぐに詠まれたこの句を読んでいるうちに対象が虫であることを忘れそうになるのは何故だろう。恐らく厳粛な死が、この句によって象徴的に語られているからではないか。

付記

◆海紅先生の句作姿勢から学んだことⅡキーワード

- ・今を愛すること・・・人生を楽しめるか
- ・自分に溺れないこと・・・どこまで自分を空ろに出来るか
- ・素直な目を失っていないか
- ・感動の焦点は何か・・・見つめる焦点と心の焦点が合っているか
- ・情を導き出すための姿は整っているか

◆先生の句を学んで気が付いたこと

- ・隠しているⅡ自分の気持ちを皆まで言わないⅡ句の背景に隠れていることがある。

← 何故か

読む人に想像させる。読んだ句に乗って自分のことにも思いを至らせる。

イメージネーションを膨らませる

その人だけの世界を構築できる

← その結果として

大事にしたいもの即ち、命、心の自由、愛すること、共感が

伝えられれば良い。